

向陽

〒780-8014 高知市塩屋崎町1丁目1-10 TEL(088)833-4394 FAX(088)833-7373

<http://www.tosaobog.com>



市原 隆 (34回生)

去る八月二十五日、兵庫県明石市の明石公園野球場において、全国高等学校軟式野球選手権大会が、創設後五〇回目の記念大会として開催されました。この記念大会の行事として日本高等学校野球連盟より、第一回大会の優勝校である土佐高に始球式をさせるという方針が示され、この旨、土佐高に通知があった由です。そこで、池上校長をはじめ関係者のお話し合いにより、第一回大会の優勝投手の私が始球式に参加させていただくという、大変名誉ある役割を与えられることとなりました。

土佐高は、昭和三二年八月下旬、プロ野球近鉄のホームグラウンド藤井寺球場で行われたこの第一回大会において、決勝戦を名門中京商業と戦い、これを1対0で下し、見事全国優勝の栄誉に浴しました。当時私は満一六歳、高校一年生でしたが、文武両道ともに秀でた先輩同輩に助けられながら、母校の名誉を担い、臆を決して投げ続け、全試合完投いたしました。往時茫茫という言葉があります、五〇年も昔のことです。青春の血潮を熱く燃えたぎらせながら戦った、はるけきも往時のあの一場面一場面を、思わずも鼻の奥にツンと来るような感懐とともに思い出すことができます。

(2面続く)

「2005 ホーム カミング デー」

ここから始まった自分に帰ろう。

日時 / 平成17年8月13日(土) / 土佐中・高等学校

プログラム	
同窓会総会 12:30~13:50 [体育館]	●開会 ●校歌斉唱 ●会長挨拶 ●学校近況報告 ●物故会員に黙祷 ●議長選出 ●事業報告 ●支部活動報告 ●審議 等
記念コンサート 14:00~14:30 [体育館]	昨年に引き続き、サマー・コンサート実現! 「現役プラスバンド部」と「土佐高OBバンド」の共演をお楽しみ下さい。
特別授業 14:40~15:20 [各教室]	恩師による懐かしの「授業」が復活します。 1 中澤 節子先生 2 三枝 重宣先生 3 高崎 元尚先生 4 竹村 節先生
懇談会 15:30~16:30 [食堂]	懐かしの食堂メニューや軽食を囲みながら、恩師や同窓生とご歓談下さい。 ●恩師紹介 ●抽選会 ●校歌・エール・応援歌 等 *学校内での開催のため、アルコール類は別出できません。ご了承下さい。
懇親会 17:00~ [得月楼 本店]	[得月楼 本店] 南はりまや町1丁目17-3 Tel.088-882-0101 会費5,000円(当日、会場にて徴収します。) ●ビール ●日本酒 ●血縁料理 等 *「ホームカミングデー」とご一緒に申し込み下さい。



(1面より)

始球式には、高野連より土佐高のユニフォームを着用されたしとのご希望があり、この事から考えても、よく見かける始球式での名士の山なりのボールというような訳にはいくまいと思いましたが、そこで、約五〇年ぶりにボールに触れ投球練習を開始したのですが、これが大変で投球ごとに腕全体に激痛が走り、距離も5mと飛びません。約四週間の練習でなんとか約一八m先の捕手のミットまでボールが届くようになり、スピードもなんとか納得のできるころまで回復したのは本当に幸運でした。

始球式は開会式後、第一試合の直前に行われましたが、私にやや気負いがあり、右打者のややインサイド寄り、捕手のミットの手前でわずかにワンバウンドしたのは残念なことでした。しかし、投球の終了と同時に満席の観覧席からオーツと地鳴りのような低い、太い感嘆?のどよめきが起こり、六五歳の投手の五〇年ぶりの投球に合格点が与えられたことを知りました。またこの始球式には思いもかけず、遠路はるばると優勝時のチームメイトや大学時代の友人夫妻等多くの方々が馳せ参じて下さり、短い時間ながら共に五〇年前の静かな栄光を偲ぶことができたのは望外の幸せでした。

副実行委員長 谷 晃 (49回生)

私たち49回生は、昨年2004年度の同窓会総会・ホームカミングデーの日に、母校の教室・施設をお借りして、卒業30周年記念事業として恩師や同期生による「補習」とソフトボールやバレーボールなどの「クラスマッチ」を開催させて頂きました。

今年度のホームカミングデー実行委員会にはそのお礼の意味もあり、案内状の袋詰め発送作業をお手伝いするくらいのつもりで参加しておりましたところ、途中から副実行委員長の肩書きが付き、ホームカミングデー当日

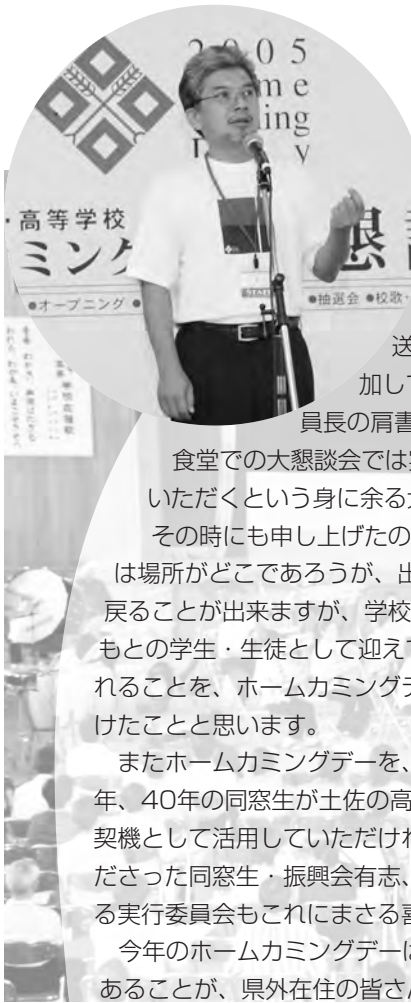
食堂での大懇談会では実行委員を代表してご挨拶をさせて頂いたという身に余る大役をおおせつかりました。

その時にも申し上げたのですが、われわれ同窓生・同期生は場所がどこであろうが、出会えばいつでも「土佐高生」に戻ることが出来ますが、学校もまた私たち同窓生をいつでももとの学生・生徒として迎えてくれる母校として存在してくれることを、ホームカミングデーを通じて再確認していただけたことと思います。

またホームカミングデーを、卒業して10年、20年、30年、40年の同窓生が土佐の高知の塩屋崎町の母校に集まる契機として活用していただければ、準備や運営にあたってくださった同窓生・振興会有志、学校教職員のみなさんからなる実行委員会もこれにまさる喜びはありません。

今年のホームカミングデーは、当日が鏡川の花火大会であることが、県外在住の皆さんが高知に帰って来ていただく材料の目玉でした。そのため行事を花火の打ち上げ時刻前に終わらせるため、まず同窓会総会を体育館で行い、同じ場所で引き続きプラスバンド部現役・OBの共演による記念コンサートをするという工夫を行いました。特別授業をしてくださった中澤節子先生、三枝重宣先生、高崎元尚先生、竹村節先生に久しぶりにお会いすることが出来た方も多かったことと思います。

懇談会場になった食堂で池上校長先生が、卒業した私たち同窓生だけでなく、同窓生が同伴されたたくさんのお子さん達「未来の土佐中・土佐高生」にも「これからも土佐校をよろしく」と歓迎の言葉を述べられました。懐かしい母校が今もここにあり、さらに発展していく再出発点に立ち会えた感慨を持ちました。ホームカミングデーが今後、学校、同窓会、振興会のみなさんをつなぐ架け橋のようなものに育ってくれることを楽しみにしています。

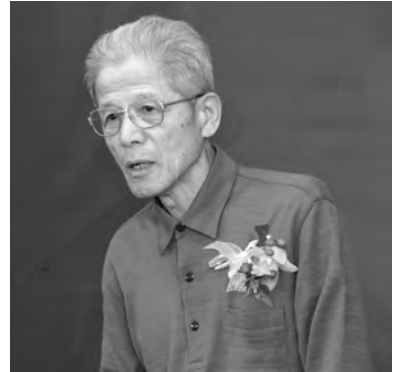


筒井 康賢 (41回生)

土佐校の千頭さんから三枝先生の特別授業の委員長をと電話。委員長なんて土佐ではやったことがないがまあ良えかと返事。

先生の特別授業は東京から夜行列車で赴任された時のお話から始まり、宇田、川崎両家の基金で買った戦時国債も戦後はただの紙切れとなり、校舎は空襲で焼かれて全く何もなくなった土佐を大島校長が孤軍奮闘で立て直したというお話でした。

委員長の大失敗は関東支部HPのホームカミングデーのページで見てください。



● 特別授業

中澤 節子先生



北川真紀雄 (44回生)

数十年振りの母校での中澤先生の授業は立ち見が出るほどの大盛況。教室は超満員。往年のあの張りのあるイントネーションとご達者なスペリング。独特の身振り手振り、タップもご健在。全てにお見事。諸氏諸先輩いらっしやる中で声が大きいことのみでの委員長役の小生。

I beg your pardon?

Yes, mam.

これだけは、しっかり覚えております。

バリバリの現役・中澤先生、いつまでもお若く、お元気で。

● 特別授業



岩崎 政雄 (50回生)

50回生は、この春、卒後30周年を迎えました。付きましては、それを記念して、平成17年8月13日に、10年ぶりに学年合同同窓会を開催いたしました。

当日は、ホームカミングデーの行事に連動する形で、本校で別途、小島先生、森本先生による、50回生対象特別授業も開催しました。参加約70名は、当時を大変懐かしく、何かしらジーンと来るものを感じながら、受講したものでした。

懇親会は、3名の恩師の参加も含め、105名の参加でサンルート高知にて開催しました。

10年前よりは少なかったのですが、以前より熱気にあふれ、昔話に花を咲かせたものでした。あつという間の2時間半で、多くの方たちと、まだまだ話し足りず、早い時期に次回の開催を求める声が、多く寄せられました。次回、5年後に合同同窓会を開催する予定にしております。

竹村 節先生



前田 賀彦 (54回生)

「委員長！」その掛け声で、竹村節先生の特別授業は始まりました。約一年半ぶりに授業をされるとのことで始まる前は少し心配しておりましたが、杞人之憂でした。あっという間の40分でした。

この特別授業を拝聴して、先生の真面目さ、そして生徒気質の分析を前提に目配りのきいた懇切丁寧な教え方をされていたことが改めてよくわかりました。

年齢的な理由とご家庭の事情で一線を退かれているとのことですが、まだまだ現役でご活躍していただかないともったいないと思いました。

委員長の「起立、礼」で、先生の特別授業は終わりました。ありがとうございました。

特別授業

高崎 元尚先生

市川 直介 (53回生)

特別授業の開始を告げるチャイムが鳴ると、美術の講師である高崎先生は、中庭から美術教室に入られた。教室のドアの方ばかりを見ていた私たち生徒は、不意を突かれ、気づくや否や一斉に拍手で迎えた。そして、教壇に行かず、生徒達の机のまわりをトコトコ歩かれ、いきなり生徒の隣にすわられた。さすが、登場の仕方も自由で芸術的である。

教室には、卒業生のお子さんやお孫さんといった超若い生徒から高崎先生と同年代の生徒まで、幅広い層が出席しており、とてもアットホームな雰囲気の中で授業は進められた。

高崎先生は、たくさんの自作品を背に、戦前から今日までの自由闊達な歩みを話された。そこからは、私の大好きな土佐校の自由な校風と高崎先生の美術と相通じるものがあり、心地よい授業だった。高崎先生の健康と益々の活躍を祈念しています。



特別授業



門田 幹也 (60回生S)

はっきり言って、60回生の独自企画は失敗でした。なんとLL教室に集まったのは、5名……。原因はいろいろと考えられますけど、来ている60回生のほとんどがなんらかの運営の仕事をしていたのが大きいですね。それと、総会と同時刻でしたが、今年の総会は注目度が高かったですし。とはいえ、ホームカミングデー自体の60回生の参加が30数名しかいなかったのも、原因です。実は去年のホームカミングデーにも30人くらい出席していました、正月には学年同窓会をと、立て続けでしたから、県外組の都合がとりにくかったようです。「1年に何回もやられてても、そんなに行けんぞ」という不参加の返事を多くもらいました。県外組や女子（嫁ぎ先の意向が重要）などの立場もふまえた長期的な戦略不足が最大の原因だったのではと思います。

企画は、当時の映画部で作った映画の上映でした。二次会でお店の厚意でカラオケの画面を使って上映させていただき、それ自体は好評だったのが救いでした。

本部活動報告

幹事長 安岡 範悦 (39 年生)

一、総会の開催

本年度も昨年に引き続き母校で開催することとし、「ここから始まった自分に帰ろう」をキャッチフレーズに準備をしてみました。

おかげ様で四〇〇名に近い同窓生が参集いただき、若い卒業生、そしてご家族で参加いただいている事は嬉しい限りです。特別授業をしていただいた恩師の先生方からも母校との絆を再認識する上でも、大変良い企画であり、是非続けてほしいとお話もいただきました。

得月楼に場所を移した懇親会にも、たくさんの方に出席いただき盛会裏に終了することが出来ました。

二、北海道支部の設立

現在、同窓会には関東、東海、関西、広島、香川の支部がありますが六番目の支部として、北海道支部が設立され、平成十七年六月十一日、札幌グランドホテルにおいて池上校長先生をはじめ本部・支部役員多数

出席のもと、設立総会が盛大に行われました。

北の大地での校歌は格別のものがあり感動いたしました。五三名の同窓生の皆さんのご活躍を期待いたします。

三、同窓会名簿発行

平成十七年四月二日開催の同窓会役員会（本部役員・幹事・代表幹事・会計監査）で承認いただいた方針に基づき、名簿作成委員会を発足させ準備を進めてまいりました。

名簿調査については①個人情報保護への対応②夫婦・親子等への重複送付や苦情への対応の視点からも同窓生全員に説明文書・調査カードを送付し、名簿への掲載可否をふまえてデータ整理の作業を進めております。完成名簿の発送については名簿購入の意思を確認する意味から、今回はお申し込み（振込み）いただいた方へ送付する手法を採用させていただきます。お申し込みが、八月十三日現在二一七〇名の申し込みとなっております。お忘れの方もおられると思います。

土佐高校の同窓会事務局までぜひお申し込み下さい。

四、池上校長辞意表明問題

私立学校法改正などに伴う寄附行為（会社の定款に相当）の修正に絡んだ問題を検討した平成十七年八月八日の理事会で、池上校長が辞意を表明されていること、宮地貫一同窓会会長、岡村甫元同窓会会長が次期理事として再任されなかったことについて、八月十二日、川崎幾三郎理事長より、理事長印を押捺した書面が同窓会に提出されるとともに、真意・意図を同窓生の皆さんに宜しくお伝えいただきたいとの表明がありました。

翌日の総会において、弁護士であり、評議委員、寄附行為検討委員会委員として本問題に関わってきた市川関東支部幹事長より経緯を報告するとともに、理事長より提出された書面を読み上げ真意を伝えました。同窓会としても理事長の考えを評価するとともに、母校土佐高校の更なる発展のため協力をしていくことを

確認しました。

五、役員選任の件

本年度総会をもって本部役員任期は終了となり役員改選を要します。平成十七年四月二日開催の役員会において満場一致で推薦された方を候補者として総会に提案し、満場一致で承認可決されました。

新役員

会長	宮地貫一	(21回)	再任
副会長	溝渕真清	(32回)	再任
副会長	岡内紀雄	(34回)	再任
副会長	横田整二	(40回)	再任
副会長	川崎康正	(42回)	再任
副会長	北村恵美子	(47回)	再任
副会長	安岡範悦	(39回)	再任
幹事長	岡田容典	(47回)	在任
副幹事長	西山彰一	(48回)	再任
副幹事長	宮地貴嗣	(61回)	再任
副幹事長	矢野公士	(62回)	新任
会計	千頭裕	(58回)	再任
会計監査	森木将雄	(32回)	再任
会計監査	田中章夫	(40回)	再任



学校近況ご報告

学校長 池上 武雄

初秋の候、同窓生の皆様にはますますご清祥のこととお慶び申しあげます。

平素皆様には母校に熱い思いをお寄せいただき、格別のご支援を賜っておりますこと、誠に有難く厚く御礼申しあげます。

昨年に続き八月十三日開催された「2005ホームカミングデー」には四〇〇名近い同窓生やご家族の皆様が懐かしの母校に集われ、総会、記念コンサート、恩師四先生による懐かしの授業、食堂での懇談会、最後は得月楼での懇親会と盛り沢山の行事が開催され、大変和やかな内にも盛会裏に終了されましたことを心からお慶び申しあげます。

(7) さて、学校の近況ご報告でございますが、まず大学入試結果につきまして、本年は特に現役生がよく頑張ってくれましたが、数の点で必ずしも満足のゆく結果ではございませんでした。年々土佐校が元気になりつつあることを感じながらも、年に

よっては少し立ち止まることもあり、大いなる反省に立って右肩上がりの上昇を期してゆきたいものと決意を新たにしている所です。

次にクラブ活動では、今年のインターハイには団体で剣道、登山、陸上競技等が出場し、登山男子(四名)が五位入賞を果たしました。顧問の先生方の日頃の熱心なご指導と部員の弛まぬ鍛錬の賜物と心から嬉しく存じております。また文化部では、文芸部の二名が全国高校総合文化祭に初出場し、文芸部門「文化連盟賞」を受賞しましたほか、第二回文部科学大臣杯小・中囲碁団体戦に出場した土佐中チーム(男子二名・女子一名)は、対局中もその後も極めてマナーが爽やかであったことを評価され、「フェアプレイ賞」を受賞しました。本校にとつて大変名誉なことと、勝敗以上の素晴らしい賞をいただいたものと喜んでおります。

二学期は校内行事が盛り沢山で、九月二十三日(秋分の日)は大運動

会が開催されます。今は校庭での予行練習や、高三生によるヤグラ製作が熱心に行われています。今年も期待通りの運動会が出来るものと思えます。十一月十七日の文化行事は、女性歌手・澤知恵さんによるピアノの弾き語り演奏が予定されています。十一月二十二日からは、高一生の修学旅行が関東・京都回りで行われます。土佐高ならではのコース別研修に生徒達は胸を膨らませております。訪問先では先輩の皆様にお世話様になります。何とぞ宜しくお願い申し上げます。

困ったことですが、七月にアスベスト問題が発生しました。本校では直ちに校舎・寮等すべての建物・施設を調査した結果、校舎の一部の天井部のほか体育館の屋根裏等でアスベストの使用が判明しました。早速夏休み中を利用してアスベストを封じ込める対策工事を体育館を除く全個所で行い、無事完了いたしました。体育館の方は使用を一時停止した上でアスベストの浮遊量調査を行い、その結果危険性が極めて小さいと判断されましたので、今後定期的な調査・監視を継続することで次の校舎改築時を待ちたいと考えております。

その校舎改築についてであります。本年三月の理事会に於て、設計

会社との契約を解約し従来進めてきた改築計画を全面的に見直すことが決定されました。校長の私に契約に関する手続き上の不手際があった事や、総投資額の過大等のご批判もあつての決定で、関係の皆様には大変ご迷惑をおかけすることになり、誠に申し訳なくお詫び申しあげます。創立百周年に向けて本校が堅実に発展してゆくため、より慎重を期すことを求められたものと大いに反省すると共に、この大事業が今後は順調に進められるよう万全を期す覚悟で見直しの作業に着手している所です。最後に、高知新聞で報道されるまでに至った本校寄附行為(会社の定款に相当)の改正問題につきましては、紆余曲折を経て八月二十五日の理事会で改正案が承認され、九月六日付を以つて県知事の認可を受けることができました。この度の混乱も一重に私の不徳の致す所であり、種々ご心配をいただいた皆様にご心からお詫びを申しあげます。

朝夕は少し秋めいて参りましたが、まだまだ残暑も続くものと思われま。同窓生の皆様のご健勝ご活躍を祈念申しあげ、近況ご報告とさせていただきます。

新生「土佐」の誕生

〜協力一致誓いして〜



同窓会会長
宮地 貫一

実りの秋を迎えて、同窓会会員の皆様におかれましては、益々ご清勝のことと存じます。今年も昨年に引き続き、同窓会総会が母校で開催され、第二回ホームカミングデーには、四〇〇名近い同窓生が集い、大盛況を収めることが出来ましたことを厚く感謝申し上げます。

さて、創立八十五周年の年、平成十七年九月六日、土佐校の寄附行為（会社の定款に相当）修正案が県知事より認可されました。今回の寄附行為の改正は、公共性を有する私学としての母校の管理・運営制度を、より公正かつ民主的な、開かれたものに改善するといふ私立学校法改正の趣旨を具体化するために行われたものです。ご存知のように、この改正について

は紆余曲折があり、同窓生の皆様には大変ご心配をお掛け致しました。難産の末に生まれたこの新しい寄附行為は、学校・振興会・同窓会の叡智を結集した近代的かつ、民主的な寄附行為となりましたことをご報告申し上げます。

これにより二十一世紀にふさわしい新生「土佐」が誕生致しました。八十五年前に、世界に羽ばたく人材輩出を願って、川崎幾三郎氏・宇田友四郎氏が私財を投じて創設された土佐中・高等学校におきましては、大変意義深いものであります。改正点の具体的な内容につきましては、理事会の諮問機関である寄附行為検討委員会のメンバー・市川関東支部幹事長（53回生）の寄稿文を読んでいたきたいと思いますが、私は、新寄附行為のもとで、評議員会の選出により、岡村甫元同窓会会長（高知工科大学学長）と共に理事に選任されました。九月八日の理事会で、私は、「これまでのように年に二回、予算決算で顔を合わすだけではなく、もっと頻繁に会を開き、理事同士のコミュニケーションを

深め、意見交換をし、協力して経営をしていくこと」を提案し、了承されました。今後の理事会の運営を担う一人として、責任の重さを改めて痛感しております。

同窓生の誇りである土佐中・高等学校が、今後も羽ばたき続けることが出来るよう、川崎家・宇田家に敬意を払うと共に報恩感謝の精神で、川崎理事長のもと、理事会の民主的運営に努力することを約束致します。必ずや、新寄附行為のもとで、「土佐」の更なる発展は実現するものと考えております。

最後になりましたが、新生「土佐」の誕生に向けて、ご尽力下さった川崎幾三郎理事長をはじめ、関係者の皆様に厚くお礼申し上げます。

今後とも、同窓生の熱き思いを結集し、学校・振興会と協力一致誓いして、新校舎建築問題等、さまざまな問題に対処していく所存でございます。皆様方のご支援を宜しくお願い申し上げます。

寄附行為改正の内容と経緯

検討委員会委員

市川 直介（53回生）

学校法人の経営の基本的な事項を定める寄附行為（会社の定款に相当）の改正案が、平成十七年八月二十五日開催の理事会で承認され、九月六日高知県知事の認可がなされ、更に九月八日開催の理事会で新寄附行為に基づき宮地貫一氏及び岡村甫氏が理事に追加選任されました。

ここに至るまで、川崎幾三郎理事長と池上校長先生の下に、多くの同窓生が、振興会の方や学校教職員とともに様々な形で尽力されたことに敬意と感謝を申し上げます。本稿では、二十一世紀における母校の更なる飛躍と同窓生の英知を学校経営に生かすことを目指した寄附行為の改正の内容と経緯を報告いたしたいと思います。

一 寄附行為検討委員会の成り立ち
平成十七年四月一日施行の私立学校法の改正に伴い、改正の趣旨に沿った内容に寄附行為を改正する必要があります。私立学校法の改正の

趣旨は、理事・監事・評議員会の制度を整備し、権限・役割分担を明確にすることによって、学校法人における管理運営制度の改善を図る、学校法人が公共性を有する法人としての説明責任を果たすという観点から、財務状況等の関係者への閲覧を義務付ける、等というものです。

平成十七年三月二十九日に開催された理事会において、寄附行為検討委員会を設置し、改正案を検討作成することが決議されました。そして、川崎幾三郎理事長は平成十七年四月二十八日付けで寄附行為検討委員会を委員を委嘱しました。メンバーは、同窓会・振興会・学校より各代表二名で構成され、座長は同窓会会長兼土佐校理事の宮地貫一氏が就任されました。

二 寄附行為改正の基本的な方針
検討委員会では、下記三点の基本方針をたて、慎重な検討を重ね、改正案を作成しました。

- 百年委員会の答申を尊重する。
- 21世紀の土佐中・高等学校の基本規定にふさわしい条項にすべく全面的な検討を加える。
- 標準かつ模範的な条項を基本に、土佐校の独自性についても加味する。

百年委員会は、平成十二年の本校創立八十周年を機に、次の百周年の節目に向けて、本校の更なる発展のための理念や施策を検討する目的で、理事会（宇田理事長・当時）のもとに設けられました。百年委員会は、以後、本校のあるべき姿を多方面にわたって検討し、その「最終報告」を平成十四年七月に理事会に答申し承認されました。最終報告において、理事会のあり方については、理事の定数を増加し、若手の活用を図る。各界で活躍している卒業生の英知を組み入れる仕組みが必要。相続人理事規定（寄附行為第五条）の是非を検討する、の内容が答申されました。

三 検討の過程

検討委員会では、従前の寄附行為の見直しを全面的に行ないました。本稿では、全部の改正点に言及することは不可能なので、理事会で最終的に問題になった論点について説明いたします。

- ①理事の定数を増員するか。
 - ②相続人理事の規定を見直すか。
 - ③他の理事の相続人理事の委嘱規定を見直すか。
- の三点です。

この点、従前の寄附行為では次のとおり規定されていきました。

従前の寄附行為

第五条 この法人に左の定数の役員を置く。
一 理事6名以上8名以内 監事2名 書記1名
二 理事になるものは左の通りとする。
1 設立者川崎、宇田両家の相続人1名は身分上法的支障のない限り歴代相承けて理事となる。但し各家の相続人2名以上の場合はその相続人に於て定めたる者。
2 この法人が設立する学校の校長
3 評議員の中から前二、二からなる理事の委嘱によるもの。
4 相続人たる理事の委嘱によるもの。

第五条二項の問題点は、特定の者が他の理事を選任することができることにより、特定の者が公的な教育機関を支配することになっている点です。相続人理事から委嘱を受けた理事が、相続人理事との人間関係ないし経済的な利害関係を優先する

ことにより、本来公的な教育機関として実施すべき施策が妨げられる等の弊害が考えられます。今日の学校経営のあり方として、理事の選任は民主的であるべきで、特定の者の意向が支配する仕組みではなく、チェックアンドバランスが機能する仕組みが必要です。

この点、高知県の担当課長が文部科学省に問い合わせた結果も、特定の者が他の理事を選任することにより、特定の者が学校経営を支配できる寄附行為は不適切であるとのことでした。

検討委員会では、従前の寄附行為と文部科学省作成のモデル案及びいくつかの学校の寄附行為との対比表を作成する等、全面的に抜本的な検討を行いました。

- 1 理事の増員について
検討委員会では、卒業生が一万七〇〇〇人もおり、各界で活躍している卒業生の英知をもつと学校経営に生かすべきではないか、若手の登用も必要ではないかとの意見が多数を占め、百年委員会の答申を尊重して2名の理事定数の増員を決めました。その結果、法律の規定により評議員の定数も四名増員となりました。
- 2 相続人理事の規定（第五条二項一号）について

検討委員会では、多面的に検討するために相続人理事規定に關し以下の条項を白紙の状態が多角的に検討しました。考えられる規定として次のものを検討しました。

- i 設立者川崎・宇田両家の相続人一名は身分上法的支障のない限り歴代相承けて理事（各家の相続人2名以上の場合は、その相続人に於て定めた者）となる。また、本号の理事は、推定相続人の中から指名した者に対し、本号の理事職を譲ることができ
 - ii 設立者川崎・宇田両家から選任された理事の相続人又は推定相続人のうち、理事会において定めるもの
 - iii 学校法人に縁故ある功労者のうち、理事会において定める者
 - iv 相続人理事規定の削除
- 文部科学省の作成例及び他校の寄附行為例との比較検討した結果、私立学校には必ず学校設備等を寄附した設立者が存在しますが、文部科学省の公表している私立学校の寄附行為例では、相続人理事あるいは縁故功労者の規定は存在しませんでした。また、他校例で設立者や縁故者を尊重する場合においても、「学校法人に縁故ある功労者のうち、理事会に

おいて定める者」との規定であり、理事会の決議を経ることにより民主的な選任方法を採用してまいりました。

検討委員会では、様々な意見が出されましたが、川崎・宇田家に対する敬意をばらうことと、今日の標準的な規定、すなわち民主的な選任方法である理事会の決議を経ることを調和し、前記 i、ii の規定を考慮した案を検討委員会の案とすることにしました。

3 相続人理事の他の理事の委嘱規定（第五条二項三号、四号）について

検討委員会では、特定の者が他の理事を選任できる規定は公的な教育機関にふさわしくないと考え、標準的な選任規定に訂正することとした。すなわち、標準的な規定である文部科学省の作成例を参照し、評議員のなかから選任される理事は評議員会で選任すること、学識経験者のうちから選任される理事は理事会で選任すること、と改正することを検討委員会の案とすることにしました。

4 検討委員会の平成十七年七月七日提出の原案

以上の検討を踏まえ、次の案を検討委員会の案としました。

検討委員会の原案

第五条 この法人に、次の定数の役員を置く。

- 一 理事 8名以上10名以内（中略）

第六条 理事は、次の各号に掲げるものとする。

- 一 設立者川崎・宇田両家の相続人1名は身分上法的支障のない限り理事会の承認を得て歴代相承けて理事（各家の相続人2名以上の場合は、その相続人に於て定めた者）となる。また、本号の理事は、推定相続人の中から指名した者に対し、理事会の承認を得て本号の理事職を譲ることができる。
- 二 この法人の設立する学校の校長
- 三 評議員のうちから評議員会において選任した者2名以上3名以内
- 四 学識経験者のうちから理事会において選任した者2名以上4名以内

<p>四 評議員会及び理事会の審議状況</p> <p>1 平成十七年七月七日評議員会及び理事会</p> <p>検討委員会の案は評議員会に提出</p>	<p>四 評議員会及び理事会の審議状況</p> <p>1 平成十七年七月七日評議員会及び理事会</p> <p>検討委員会の案は評議員会に提出</p>
--	--

され審議されました。原案の第六条一項のうち、相続人理事を選任する場合の「理事会の承認」を削除する修正案ならば、欠席理事から委任された理事も賛同できるとして修正案が提出され、評議員会で審議の結果当該修正案を評議員会の意見として理事会に提出することになりました。そして、理事会では当該修正案が審議され、採決の結果、三分の二以上の賛成で可決され、高知県知事の認可を得るべく提出されました。

しかし、欠席理事の真意は、修正案にも反対であることが後日判明しました。そこで、学校は寄附行為の申請を取り下げ、再度検討することになりました。

2 平成十七年七月二十二日検討委員会開催

検討委員会では、前記事態を受け、緊急に会議を開催しました。現行の理事定数「6名以上8名以内」の規定及び現行の理事選任規定の第五条二項三号、四号、すなわち相続人理事が他の理事を選任する規定を再度検討しました。

検討委員会の一致した意見は、「理事定数を現行のままにすることは認められても、相続人理事が他の理事を選任する規定は改正するべき」でした。その後、検討委員会の

意見を理解してもらおうべく働きかける過程において、更なる妥協案を模索し、第四号理事について理事会で選任するが、その場合に相続人理事の意向を尊重するとの規定を入れることで理解が得られないかを試みました。

3 平成十七年八月八日評議員会・理事会

評議員会において今日までの経緯及び理事会で理事を選任する場合相続人理事の意見を尊重することを盛り込んだ修正案が提出されました。しかしながら、理事会において修正案は可決されず、不採択となりました。加えて、八月十日任期が切れる理事の後任理事について、寄附行為の改正に賛成の立場をとっていた宮地理事および岡村理事を再任しない文書が提出されました。

このような、理事会の結果および後任理事の選任状況を踏まえ、池上校長は退任の意向を理事長に伝えましたが、理事長は、池上校長に対し慰留を行い、平成十七年七月七日の理事会に提出された修正案に改正を行なうこと、及び宮地・岡村両氏に対して理事への就任を要請すること（理事長はもとから宮地氏と岡村氏の再任を指示していたことも判りませんでした）を説明され、池上校長は辞意

を撤回されました。

理事長のこの意向は、平成十七年八月十三日開催の同窓会総会において、安岡幹事長よりメッセージを読む形で同窓生に発表されました。

川崎幾三郎理事長の見識の深さには、紙面の関係もあり十分に言及できませんが、ご家族含め人格者であり、私利にこだわらず高い視点での迅速な英断は土佐校の歴史に尊敬と報恩感謝の対象として刻まれたと思います。

その結果、七月七日の修正案が、平成十七年八月二十五日開催の理事会で承認され、九月六日高知県知事の認可がなされました。更に、九月八日開催の理事会で新寄附行為に基づき宮地貫一氏及び岡村甫氏が理事に追加選任されました。

六 最後に

検討委員会は、川崎・宇田両家に敬意を払うとともに、現代社会における公的な教育機関の経営を委ねる理事の選任方法として標準的であった、川崎幾三郎理事長や池上校長先生の理解を得られ、また多くの同窓生、振興会の役員の方、更には学校教職員の方の支援を得て改正を実現することができました。他方、この

改革を推進する関係者に対して、心無い者から不謹慎な誹謗中傷や脅しめいた行為もありますが、公的な教育機関である学校を私物のように理解する考え及び利害関係者のみが学校経営を行なう考えは間違っております。

二十一世紀において、厳しい教育環境の下、土佐校生が世界に大きく羽ばたけるよう、学校当局と振興会と同窓会が協力一致して経営していくことのできる規定及び体制に前進したと思います。この紙面を借りてご支援いただいた多くの皆様に厚く感謝申し上げます。

改正された項目抜粋

第五条 この法人に、次の定数の役員を置く。

一 理事 8名以上10名以内
(中略)

第六条 理事は、次の各号に掲げるものとする。

一 設立者 崎宇田両家の相続人1名は身分上法的支障のない限り歴代相承けて理事（各家の相続人2名以上の場合は、その相続人に於て定められた者）となる。また、本号の理事は、推定相続人の中から指名した者に対し、本号の理事職を譲

ることができる。

二 この法人の設立する学校の校長

三 評議員のうちから評議員会において選任した者2名以上3名以内

四 学識経験者のうちから理事会において選任した者2名以上4名以内

第二条（評議員会）

二 評議員会は、17名以上21名以内の評議員をもって組織する。

第五条（評議員の選任）

一 この法人の職員のうちから、理事会において選任される者3名

二 この法人の設置する学校を卒業したもので年齢二十五年以上の者のうちから、理事会において選任される者3名以上4名以内

三 理事のうちから、理事会において選任される者3名以上4名以内

四 この法人の設置する学校に在籍する生徒の保護者のうちから、理事会において選任される者3名以上4名以内

五 学識経験者のうちから、理事会において選出される者5名以上6名以内

スポーツ 武道



四国大会優勝!! 陸上 男子団体 1600mリレー



他にも

ボーリング 矢野一輝 国体予選1位
武術太極拳 山崎理圭
ジュニアオリンピック全国5位

全国大会出場者

高校

棋道部 男子 中尾鷹詔、松本拓也、田植壮
女子 田村史翔
文芸部 大久保早織、岩田智美
放送部 石川由季

中学

弓道部 男子団体
空手部 女子個人組手 佐々木里紗
棋道部 男子 一圓健太、橋本和侑、竹内千翔、中谷寛
女子 前川花野

二〇〇五年大学入試を振り返って

合格の状況

国立大学	現	浪	計	進学
北海道大	1		1	1
北見工大	1		1	1
東北大	1		1	1
筑波大	2	1	3	2
群馬大	1		1	1
千葉大	3		3	2
東京大	2		2	2
東京外国語大	1		1	1
東京工業大		1	1	1
お茶の水女子大	1		1	1
横浜国立大	5	3	8	7
新潟大		1	1	1
信州大	1	1	2	2
名古屋大	1	1	2	1
滋賀大		1	1	1
京都大	7	2	9	9
京都工繊大	1		1	1
大阪大	5	6	11	11
神戸大	4	5	9	9
奈良女子大	1		1	1
和歌山大	2		2	2
岡山大	17	5	22	15
広島大	3	2	5	4
山口大	2	1	3	1
徳島大	3	3	6	6
香川大	5	2	7	6
愛媛大	4	2	6	3
高知大	22	5	27	21
九州大	1		1	1
大分大		1	1	1
宮崎大	1	1	2	2
鹿児島体育大		1	1	1
鹿児島大	1	1	2	2
琉球大	2		2	2
計	101	46	147	123
昨年	88	56	144	132

公立大学	現	浪	計	進学
首都大学東京	3	1	4	2
横浜国立大	3	1	4	3
神奈川県保福大	1		1	1
山梨県立大		1	1	1
岐阜薬科大	1	1	2	1
名古屋市立大		1	1	1
大阪府立大	1	4	5	2
大阪市立大		1	1	1
兵庫県立大	1		1	1
和歌山県立医大		1	1	1
県立広島大	1		1	1
尾道大		1	1	1
下関市立大	1		1	1
高知女子大	2		2	2
計	14	12	26	18
昨年	13	12	25	21

私立大学	現	浪	計	進学
日本赤十字北海道		1	1	
東北薬科大		1	1	
自治医科大	1		1	1
獨協医科大		1	1	1
文教大	1		1	1
青山学院大	4	4	8	2
学習院大	2	2	4	2
北里大	3		3	3
杏林大	4	3	7	1
慶応義塾大	14	9	23	8
駒澤大	1	5	6	
芝浦工業大		3	3	
上智大	1	2	3	1
昭和薬科大		1	1	
成蹊大	2	1	3	2
成城大	1	2	3	1
専修大	4	4	8	4
大東文化大	1	1	2	2
拓殖大	1	1	2	
玉川大	2		2	
中央大	15	12	27	6
津田塾大		2	2	
帝京大	1	2	3	1
東海大	2	1	3	
東京経済大	3	1	4	1
東京女子大	2		2	1
東京女子医大	1		1	
東京電機大	1		1	
東京農業大	1	1	2	1
東京薬科大		3	3	1
東京理科大	7	11	18	3
東洋大	3	5	8	1
日本大	3	7	10	3
日本医科大		1	1	
日本女子大	2		2	
文教学院大		1	1	1
法政大	4	7	11	3
武蔵工業大	1	1	2	1
武蔵野音楽大	1		1	1
明治大	3	5	8	5
明治学院大	2	3	5	1
立教大	7	5	12	4
立正大	4	3	7	
早稲田大	15	15	30	12
麻布大	1		1	
東京工芸大	1		1	1
金沢工業大	1		1	
準大学				
防衛大	2	1	3	1
防衛医大		2	2	
計	2	3	5	1

私立大学	現	浪	計	進学
愛知学院大	1	1	2	1
愛知工業大		1	1	
中京大		1	1	
京都外国語大	1		1	
京都産業大	2	1	3	1
京都薬科大	1	2	3	
同志社大	22	8	30	12
同志社女子大	1		1	1
立命館大	18	23	41	8
龍谷大	5	1	6	
大阪医大		1	1	1
大阪経済大	7		7	
大阪芸術大	1		1	
大阪電気通信大	1	1	2	
大阪薬科大	1	3	4	
関西大	15	5	20	1
関西医科大	1		1	1
関西外国語大	1		1	
近畿大	4	7	11	1
近畿福祉大	1		1	
摂南大	2		2	
帝塚山学院大	1		1	
桃山学院大	3	3	6	
芦屋大	1		1	1
関西学院大	20	12	32	8
甲南大	2	1	3	1
神戸学院大	9	2	11	2
神戸薬科大	1	2	3	1
関西福祉大		2	2	2
奈良大	1	1	2	1
岡山理科大	2	3	5	
川崎医科大	1		1	1
就実大		1	1	
吉備国際大	1		1	
川崎医療福祉大	4		4	2
広島国際大	1		1	1
徳島文理大	1	5	6	4
高知工科大	8	2	10	3
福岡大	1		1	1
福岡歯科大		1	1	1
立命館アジア太平洋大		1	1	
その他	2	3	5	
計	269	221	490	131
昨年	267	275	542	

医学部進学者	現	浪	計	進学
私立大学				
国公立大学	4	10	14	14
私立大学	4	7	11	7
防衛医大		2	2	

進路部長 岡松 宏明

二〇〇五年度は現行課程の最後の年になります。来年度からはリスニングを含めて入試課目、内容が変わりますから全国的には手堅い受験方法をとる雰囲気があります。本校においては国公立大学に於いては、現役の合格者が一一五名と、本校の目標としている一〇〇名のラインを大きく超える成果をあげました。特に横浜国立大、岡山大、高知大で多数の現役生が合格しました。また、京都大九名中七名、東京大二名中二名をはじめ、いわゆる難関一〇大学（旧帝大七校・東工・一橋・神戸）の合格者は三六名中二二名が現役生であり、ここにおいても現役主導の合格状況であったことがわかります。また全国一の難関、東京大学理科Ⅲ類に二年ぶりに現役合格者が出たのもうれしい話題でした。

この結果の原因として、高三生諸君のセンター試験へ向けた集中した頑張りあげられます。この学年は三年になっても遅刻欠席が例年に比べ非常に少なく、また夏季・冬季補習への出席も良好です。



支 部 だ よ り

関東支部

西岡 恒憲 (41回生)

関東地方も暑さの盛りは過ぎて、朝夕は涼ぎやすくなりました。

この「向陽」が出るのはようやく秋も深まる頃になるのでしょうか。

高知在住の同窓生の皆様もお元氣にお過ごしのことと思います。

関東支部の今年の活動を概括いたします。

二月十二日にホテルグランドヒル市ヶ谷におきまして、学年幹事会が開催され、去年の活動報告・今年の活動予定ならびに他の決定がなされ、平成十七年度の同窓会活動が開始されました。

五月二十八日に同じホテルグランドヒル市ヶ谷において、三百人を越す同窓生が一堂に会して、平成十七年度関東支部総会・懇親会が盛大に挙行されました。

今年度の講演会講師は前駐ガーナ共和国特命全權大使の浅井和子さん(35回生)で、ご主人(30回生)と婦

唱夫随の二人三脚外交のお話を楽しく拝聴させていただきました。

七月に筆山38号を発行しました。いつもながら関東支部には色んなニュー

スがあり、掲載記事には事欠きません。全部掲載できないのが残念、というよ

うな状況です。

今年も非公式な懇親分科会活動が色々と行われています。毎月第一木

曜日には銀座「土佐酒蔵」で土佐流懇親会「一本会」が行われています。

七月十六日・十七日には老若混浴の「土佐ハイクの会」が会津磐梯山に登

つて来て、クマに遭遇した、とあとで騒いでいました。十月には久しぶりの

「はちきん会」が女性同窓生を中心に行われる予定です。また、支部行事で

はありませんが八月二十八日に浅井前大使肝いりで原宿の「スーパードよさこい祭」に、来日中のガーナ高校生が

「ガーナでよさこい連」を組み、踊りました。多数の同窓生が、踊り手として、また裏方として参加・協力しまし

た。

公式行事としては、70回生以後を中心とした TOSA 70's Party (関東支部若手の会) が年内に行われる予定です。

関東支部のどのような行事・イベントでも、同窓生の飛び入りは大歓迎です。関東支部ホームページ・他の情報

で行事予告を知ったら、ぜひ、参加してください。お待ちしております。

た。最後まで学校中心の学習姿勢を貫くことが出来たことが良い結果をもたらした大きな理由といえます。それに加えて、月・土の放課後を利用した学年団の先生を中心とした補習、十一月から二月にかけての豊富な模試練習なども効果的に作用し、最後にきての実力の伸びにつながったのだと思います。また国公立を最後まであきらめず挑戦したことが、後期合格者三五名という立派な結果につながりました。私立大学に目を移すと、総数は過年度生の合格数は五〇名ほど少なくともりましたが、現役生は早慶上智で三一名(昨年度三二) 関関同立七五名(昨年度七九名)と健闘し、ほぼ例年通りの結果を収めました。

しかし、今後検討していくべき点もいくつかあります。例をあげれば東京大・一橋・東京工業大の首都圏関大に今年は十分な結果を出せなかった点、医学部医学科の合格者が昨年・一昨年に比べて減少した点などです。この反省を今後に生かし、より一層の成果を収められるよう努力してまいりたいと思います。

東海支部

神宮 美恵子 (44回生)

同窓会本部の皆様、今年も「ホームカミングデー」の開催、本当にお疲れ様でした。引き続き同窓会名簿の発行を控えて、皆様のご苦勞がしのばれます。

東海地方では三月に開催された愛・地球博も終盤に入り、閉幕を前に休日などは歩くのもままならない状態が続いております。目標の入場者、一五〇〇万人はすでに達成し二〇〇〇万人に迫る勢いということですが、パスポート券で一〇〇回以上も訪れたという猛者もいるそうです。今年は、セントレア開港から始まって、万博、トヨタの好況、「名古屋めし」のブームなど「元氣な名古屋」が続いております。ただ万博後は跡地利用も含めて、万博テーマの「自然の叡智」の真価が問われることになるでしょう。ただの「祭り

のあと」にはして欲しくないとはいいます。

さて、東海支部では例年通り五月に支部総会を開催いたしました。恒例の高知商業同窓会との同日、同所開催でした。母校から池上校長先生、本部からは安岡幹事長にもご出席いただきありがとうございます。これからは東海支部の二大行事の一つである年末の懇親会に向けての準備が始まります。そんな中、東海支部の副幹事長で、中部高知県人会の名物幹事でもある天造豊彦さん(52回)の山形転勤が決まり、一同大ショックを受けております。これから彼の「フレイフレイ土佐高」の美声が聞かれないのかと思うと残念至極です。しかしご栄転とのこと、新しい土地でのご活躍をお祈りしたいと思います。

最後に本部の皆様のご健勝と益々のご発展を祈念して支部だよりとさせていただきます。

関西支部

永野 元玄 (29回生)

昭和28年硬式野球部主将・準優勝
昭和三十一年にその第一回大会を開催した「全国高等学校軟式優勝野球大会」(現在は「全国高等学校軟式野球選手権大会」)が今年第五〇回目の大きな節目の大会を迎えた。その記念すべき「第一回大会」を見事に制覇したのが母校チーム(32・33・34回生)であった。

この大会、各地区大会を勝ち抜いて参加した全国一五校により熱闘が繰り広げられ、母校は初戦高崎商高に1対0、準々決勝戦で福島商高に3対0、準決勝戦では北海高校を2対1と逆転し、決勝戦では中京商高との熱戦を1対0で下して見事に大会最初の覇者となったのである。大阪・藤井寺球場での快挙であった。

この大会は第二五回までを藤井寺球場、第二六回以降は明石公園野球場と高砂球場に会場を移して、丁度二分した形で歴史を刻んで来たが、今年半世紀を迎えたことになる。

八月二十五日、明石公園野球場で開催した「第五〇回大会」開会式あ

との第一試合で、見事に始球式の大役を果たした。池上校長特注なる母校、純白のユニフォームに身を包んだ市原投手は前夜から、ゲートに入った競馬馬!の如くに張り切っていて、本番前のウォーミングアップのキャッチボールを入念にしたいので小生に相手をして貰いたいと申し込まれたのであるが、ここは日本高野連・脇村会長(キャッチボールが大好き?人間)に相方をして貰った理想的と考え、お願いしたら一も二もなく「喜んで:」ということでも臨時バッテリーが実現した。それが入念も入念、それこそ五〇球以上に及んだのではなかったろうか。この場面、暴投により七〇歳台の脇村さんがボールを拾いに行くこと数度、「オーイ市原君、自分で拾いに行かんかー!」と同窓の後輩に怒鳴るなどの微笑ましい光景になってしまふ始末でもあった。

今回の開会式では第五〇回を記念して歴代優勝校のプラカードが入場行進したが、過去四九回の二八校の先頭を切って母校のそれがグラウンドを一周した。感動の場面であった。優勝を勝ち取ったチームは急造でもあり、数々の苦難を乗り越えての勝利であった。

広島支部

川崎 一仁(50回生)

今年終戦六〇年ですが、先日、テレビで松たか子主演の広島への原爆投下を題材にしたドラマがありました。このドラマは重いかなどという先入観があつて、高知にいる頃(土佐中高時代ですが)は見なかったのですが、広島にいるためあつて原爆投下の詳細に詳しくなると、見てみようかなと思うようになり、当時の広島産業奨励館(今の原爆ドーム)が、実際に何億円かかけて東京のスタジオに実物大で復元されたとのことであつて、見てみました。その建物もなかなかよくできており、町並みの雰囲気、松たか子の広島弁もそれらしく出来ておりました。

義理の母が、まさに松たか子の妹役(三女) くらいの年で、実際に建物疎開などに動員されてその朝集合しているときに原爆が投下されたとのことでした。たまたま集合場所が爆心から離れていたため助かったとのこと。このドラマは実際の状況をよくふまえて作られており、ドラマとしてもまずまずよく出来ていたと思います。

広島には原爆ドームとは別に、江田

島には元海軍の兵学校、呉には大和ミュージアム(大和の縮小艦が実際に作られております)があり、観光地になつておりますが、戦争を美化するのではなく、実際はどうだったかを知ることが大切ではないかなと思います。

私は広島支部のホームページの担当者もやっておりますが(やったことのない者が初めてホームページというものを作りまして、慣れないので多々迷惑をおかけしていて申し訳ありません)、毎年支部総会の翌日、講師の方を囲み観光ツアーを催しまして、昨年は江田島ツアーを行いました。それは「江田島訪問便り」として支部ホームページに掲載しております。小島康さん(37回)の文章には胸が打たれます。一度ご覧ください。尾道には映画のセットに使われた実物大の大和の甲板と砲台があり、これも観光地となっております。

高知も空襲を受けておりますが、大和に限らず戦争と平和を考えるために、そのようなゆかりのあるところツアーもたまにはよいのではないかと思います。近々、高知の父と一緒に尾道と呉に行つてみようと思つております。またそのときには広島支部ホームページに掲載しますので、よければご覧ください。

香川支部

土田 哲也(32回生)

香川県は、昨年の水害の地から一転して渇水の地となりました。ローカルニュースで毎日早明浦ダムの風景と少なくなる一方の貯水率(すでに二度〇%を記録)を報道しています。十一年前も深刻でしたが、今年はそのをしのぐかもしれませ

ん。

今年の支部総会は、七月二日にサンポートで開催し、来賓六人(中には大幅な列車遅延で長い時間を要して到着された方がいました)と四三人の会員が出席して賑やかに進行了ました。ただ天気が悪くて日没が見えず残念でした。総会という形式を最低限維持しますが、高知流ですぐ宴会となります。話がはずみ、酒もすすみました。校歌斉唱はきちんとしてきました。夜景が

映えるころ来年の再会を誓つてお開きになりました。

支部の活動は、支部総会と本部・他支部との交流(二人出席が原則ですが)

です。今年も本部総会は、母校でのホームカミングデー行事の一環として開催されました。総会、ブラスバンドの演奏、かつての恩師の特別授業、参加者の懇談会など、昨年同様の盛りだくさんの内容でした。これに出席させてもらつて堪能しました。このスタイルが定着するようであれば、交代しあつて支部からの参加者を増やしたいと思います。今年には北海道支部も立ち上がったそう、同窓会が元気に成長していることは何よりです。

残暑が続く折から皆様の御健勝を祈念しております。



振興会活動報告

会長 国見 直樹

(19) 爽やかな青空の下、赤とんぼの秋を迎えております。土佐中・高等学校同窓会会員の皆様方には、益々ご清栄の事とお慶び申し上げます。また先日八月十三日同窓会総会であるホームカミングデー二回目の開催の成功、おめでとうございました。

もう皆様御承知のことでしょうが、総会に先立ち、八月八日の土佐校臨時理事会において、土佐校理事会は崩壊し、我々が敬愛し、信頼する池上校長先生が辞意を表明される事態となりました。その直後に行われる同窓会総会はどうなるんだろうと危惧しましたが、おおむね正しく記載された高知新聞の記事が八月十二日、十三日、十四日、二十六日と連日報道され、理事長である川崎幾三郎さんはじめ川崎家の皆様の卓越した見識により事態が収束された事に安堵すると共に、土佐校の名誉、誇りを取り戻せた事に感謝致しました。同窓生にとって学校とはその時代時代に、試験や、運動会などの学校行事の中で、あるいは友人や先生方との関わりの中で、どのような体験をなされ、どのように記憶に留めたかによって学校への思いは異なる事でしょう。当然青春のひと時です。私事で失敗も多々あったはずですが、私事ですが、長女が平成五年に土佐中に入学して以来、四番目の三女が現在高三生ですので、子供の在学十三年の間、保護者として土佐を見つめて参りました。それぞれ六年在学しましたが、次女などは早や子供は土佐に絶対入れると言っています。如何なる学校生活を送ったにせよ、土佐校での在学を良い記憶に持ち、誇りとしてくれていている事は、親として同窓生として何よりも嬉しい事です。私は、来年春に子供が卒業すると共に振興会会長も引退いたしますが、今後は同窓生として子供たちと一緒にずっと土佐校を見つめていこうと思っております。

振興会役員名簿
(平成十七年九月現在)

会長	国見 直樹
副会長(広報)	徳永 俊一
副会長(総務)	北村恵美子
副会長(進学)	田中佳代子
監事	山本 志雄
監事	久松 朋水
理事	島内 祥宏
理事	筒井 善樹
理事	上岡まゆみ
理事	西村希多子
顧問	杉本 雄一
顧問	毛山 章
顧問	西山 彰一
顧問	中澤 陽一
顧問	竹村 晴光
顧問	南 範子

編集後記

この夏は学校で北村副会長の車を見るたびに、「今日は何の会やつたかねえ?」。なにしろ今年は『ホーム・カミング・デー』に加え、『会員名簿』の発行、『向陽』の発行と、ほぼ同じメンバーが何度となく会を開いていました。夏休みも終わりに近づいたある日の午後、北村副会長の車が玄関に……。『……今日は……』。

「ところで、『向陽』もそろそろ考えんといかんのですが……」と千頭さん。そのまま編集会議に……。今年の夏の話は、『もう一つの甲子園』全国高校軟式野球大会の始球式に第1回大会優勝のわが土佐高校から市原さんが参加したことです。1面はこれで決まり、あとは例年のように……。話はとんとん拍子で決まってきました。急な原稿依頼に快く応じてくださった同窓生の皆さん、ありがとうございます。来年はもう少し早めに準備をしたいと思います。きつとまた同じことを繰り返しているんだらうな……。(岡田容典・47回生)





2005.9.27 大運動会開催



土佐中・高等学校

学校説明会

説明学校	10月 9日 (日)	午前10時～	本校
中学校	10月23日 (日)	午前10時～	本校
説明地区	10月30日 (日)	午後2時～	教育委員会館
土佐・高知地区	11月23日 (日)	午後2時～	南校
徳島地区	11月23日 (日)	午後2時～	徳島市社会福祉センター

〒780-8014 高知市取原岡町1丁目1-1-0

TEL 088-833-4264

FAX 088-833-7373

E-mail tsos@tsos.ed.jp

URL http://www.tsos.ed.jp/

※説明会の説明内容は、ホームページに掲載いたします。
※参加ご希望の方は、本校説明会頁にご連絡下さい。案内書・申込書をお送りします。



歴代運動会のパネルを作りました。
学校に保管します。
貸し出しもOKです！

◀2005年学校説明会ポスター
(広報部担当)

全国制覇から半世紀、軟式野球

(29回生) 永野元玄

(昭和28年硬式野球部主将・準優勝)

母校の野球チームが全国大会で優勝していたことをご存知だろうか。40回生前後の方は記憶におありと思うが、硬式大会で昭和28年夏と昭和41年春に決勝戦で敗れて頂点をきわめることが出来なかった優勝を軟式大会では見事に達成していたことを。

昭和31年にその第1回大会を開催した「全国高等学校軟式優勝野球大会」(現在は「全国高等学校軟式野球選手権大会」)が今年第50回目の大きな節目の大会を迎え、8月25日から開催された。その記念すべき「第1回大会」を見事に制覇したのが母校チームであった。32・33・34回生の精鋭達の快挙であった。

この大会、各地区大会を勝ち抜いて参加した全国15校により熱闘が繰り広げられ、母校は緒戦高崎商高に1対0、準々決勝戦で福島商高に3対0、準決勝戦では北海高校を2対1と逆転し、決勝戦では中京商高との熱戦を1対0で下して見事に大会最初の覇者となったのである。大阪・藤井寺球場での快挙であった。この大会は第25回までを藤井寺球場、第26回以降は明石公園野球場と高砂球場に会場を移して丁度二分した形で歴史を刻んで来たが、今年半世紀を迎えたことになる。

当時のメンバーは以下に記すが、今回の第50回記念大会行事の一つとして「第1回大会優勝校の選手(当時)による“始球式”」をして欲しいとの要請が日本高等学校野球連盟からあった。そして池上校長にその人選をお願いした結果、あの大会を一人で投げ抜いた、当時1年生投手・市原隆氏(34回生)に決まった。聞けば、市原氏は「先輩がおられるのでは非先輩に…」と辞退したそうだが、最後は結局、学生監督を務めた正木淳司氏(32回生)からの「監督の命令じゃ、投げて来い！」で落ち着いたそうである。

8月25日、明石公園野球場で開幕した「第50回大会」開会式あとの第1試合で見事に始球式の大役を果たした。池上校長特注になる母校、純白のユニフォームに身を包んだ市原投手は前夜から‘ゲートに入った競馬馬?!’の如くに張り切って?いて、本番前のウォーミングアップのキャッチボールを入念にしたいので小生に相手をして貰いたいと申し込まれたのであるが、ここは日本高野連・脇村会長(キャッチボールが大好き?人間)に相方をして貰ったら理想的と考え、お願いしたら一も二もなく「喜んで…」ということで臨時バッテリーが実現した。それが入念も入念、それこそ50球以上に及んだのではなかったろうか。この場面、暴投により70才台の脇村さんがボールを拾いに行くこと数度、「オーイ市原君、自分で拾いに行かんかー！」と同窓の後輩に怒鳴るなどの微笑ましい光景になってしまう始末でもあった。

さて、始球式本番の一球入魂の投球はどんな具合であっただろうか?これはここでは秘すことにしたい。(結果にご興味のある方は然るべくご確認を)

ここで当時の優勝チームメンバーを記す。(敬称は略す) 責任教師は竹村一水(故人)、

監督は富田俊夫先生（故人）だったが校務で出られず、硬式野球部同僚の正木淳司（32回生）が急遽かり出された。選手は谷中敬功（32回生）・桑名堯（旧姓久竹・34回生・故人）・中屋英隆（32回生）・上田宗一郎（34回生）・明神聡（34回生）・三宅ヨシマル（32回生・主将・故人）・熊野健彦（33回生）・請川宏（33回生）・金子肆（33回生・故人）・市原隆（34回生）・浜田卓夫（現山岡・34回生）・八井田元（34回生）・篠原舜治（32回生・故人）の総勢15名であった。第50回大会を迎えて初回大会の重みを持った快挙が既に鬼籍に入られた方々への追悼と朗報になってくれたことと思う。今回の始球式当日にはチームメートの請川・上田・山岡・八井田4氏、それに応援団の宮川洋治氏（33回生）が遠路駆けつけてスタンドから熱い想いを馳せていたのが印象的であった。

今回の開会式では第50回を記念して歴代優勝校のプラカードが入場行進したが、過去49回の28校の先頭を切って母校のそれがグラウンドを一周した。感動の場面であった。

優勝を勝ち取ったチームは急造でもあり、数々の苦難を乗り越えての勝利であった。ここで「30年史」に掲載された総評の一部を借用させて貰い、当時の模様を追憶しながら快挙の再確認と始球式関連の報告に代えさせて貰う。

先ず見出しは「優勝投手は1年生、急造チームの土佐」。本文……「優勝した土佐に幸運だったのは、決勝戦の予定された8月28日が雨で中止になり、試合が1日延びたことだ。27日の準決勝戦の試合中、1年生投手の市原が急に熱を出した。ともかくこの試合は投げ抜いたが、その夜になって熱は40度近くまで上がった。翌朝には下がりかけたが、それでも1日ゆっくり休めたのは、体力の回復に貴重だった。市原は準決勝戦までの3試合、変則的な投球フォームながらコントロールが良く、シュート、カーブ、ドロップを巧みに織りまぜて、打たれた安打9本、1点しか与えていなかった。決勝でも中京商に二塁を踏ませない好投で、チームの軸であった。土佐に軟式部が誕生したのはこの年の6月である。別項の「思い出」の中で、請川さんがくわしく書いておられるが、監督も予選中の富田俊夫先生が校務で参加出来ないというので、硬式部員の3年生、正木淳司さんが代わってベンチへ入るなど、すべてがにわか造りのチームだった。それだけに優勝の喜びは大きい。三宅主将は“初めての大会に優勝出来て胸がいっぱいです。やはり決勝の中京商戦が苦しかったですが、準決勝で北海に逆転勝ちしてから、これなら優勝も、と自信をつけました”と、決勝の後に話している。また、真新しい優勝旗とともに国鉄（現JR）高知駅へ帰った選手を出迎えた、高知県高野連会長で、土佐高校長の大嶋光次先生も手放しの喜びよう。“この夏は、高知県勢が徳島県勢に甲子園出場を阻まれて、大変切ない思いをしたが、それをいっぺんに晴らしてくれた。とにかく高校野球の全国大会で、優勝旗が高知県に来たのは初めて。こんなうれしいことはない”と、話した」と総括されている。

50回を記念した行事の一つとして「50年史」が編纂されるが、ここでも第1回優勝校としてメンバーの中から寄稿を要請されている。

ただ、いま軟式野球部は無い。

以上